おじいさんのハーモニカ

― 豊かな場面想起による効果的な展開 ―

(1) 主題名　責任ある行動〔１－（３)〕　関連項目〔２－（２)，４－（８)〕
(2) ねらい　自ら考え，誠実に実行して，責任をもって行動しようとする意欲を育てる。
(3) 資料名　「おじいさんのハーモニカ」
(4) 授業の展開例

	学習活動	主な発問と生徒の心の動き	留意点
導入	1　心の耕しを行う。	○　今までに手品（マジック）を見たことがあるか。また，手品を人前でやったことがあるか。	○実際に教師が手品をやってみせるのもよい。
展開	2　資料を読む。		○資料の準備
	3　おじいさんの気持ちを考える。	○「この馬鹿もんが！何を勝手なことをするか。」と家族全員を一喝したときのおじいさんの気持ちはどうだったか。 ・自分の同意も無く勝手なことをされて腹が立つ ・たくさんの家族がいてどうして自分の気持ちをわかってくれないのか情けない	○作者の気持ちとおじいさんの気持ちを比較して考えさせる。
	4　おじいさんの人間としての優しさをくみとる。	○おじいさんがハーモニカで『ふるさと』を吹いている情景を想像して，お年寄りが涙する理由を考える。 ・昔を思い出して懐かしんでいる ・故郷で今日を迎えられたことに感謝している	○ハーモニカに込められたおじいさんの思いをくみとらせる。
	5　おじいさんの誇り高い生き方に学ぶ。	○なぜ，おじいさんは無理をおしてまで敬老会に参加したのか。 ・敬老会に参加している人が余興を楽しみにしているから ・一度約束したことは破棄したくなかったから	○信頼関係が成り立つためには自分に対しても世の中の人々に対しても誠実でなければならないことを考えさせる。
		◎おじいさんの姿を思い出すとなぜ，思わず背筋が伸びるのか。 ・自分の行動をおじいさんが見ているような気がするから ・おじいさんの人間としての強さと優しさを思い出すから	○人間として誇り高く生きたおじいさんの姿を通して，責任ある行動の大切さを感じとらせる。
終末	6　もう一度自分を見つめ直してみる。	○自分の生活を振り返り，似たような経験を想起し，ワークシートに書く。 ○教師の説話や友だちの話を聞く。	○ CD で『ふるさと』を流してもよい。 ○「心のノート」P.24と P.25を開き自己を見つめ直す機会に活用する。

「おじいさんのハーモニカ」

もうすぐ、僕は就職する。明日は、おじいさんの七回忌である。
おじいさんとの思い出は沢山あるけれど、中学校一年生の敬老の日のことは、今でも僕の心に強く焼きついて離れることはない。

当時おじいさんは、趣味で手品（マジック）を習っていた。市民講座に応募して週に二回ほど通ったのがきっかけだったが、次第に、おじいさんにしかできない新しい手品を身に付けるほどの腕前にまで上達した。そして、ボランティアとして講師に招かれることやいろいろなパーティーに出演する機会が多くなっていた。
そんなおじいさんのもとへ、「九月十五日の敬老の日、公民館で行われる敬老会の余興に是非とも出演してもらいたい。」というお願いの電話があった。おじいさんは遠慮しながらも快く引き受けた。その日からおじいさんは以前にもまして、自分の芸に磨きをかけていった。また、お年寄りに喜んでもらうために得意のハーモニカの演奏も始めた。
ところが、敬老会の前日になって、急に体調を崩してしまったおじいさんは、朝から食事をとることもなく、ずっと寝込んでしまった。
様子を見ていたお父さんは、おじいさんの熱があまりにもひどいので、夕方、敬老会の実行委員長さんに、断りの電話を入れた。電話口で申し訳ないなさそうに頭を下げているお父さんを見ながら僕は、「残念だけれども、仕方がないことだ。」と思った。
夜、おじいさんにそのことを知らせると、今までぐったりしていた姿から一変して、「この馬鹿もんが！何を勝手なことをするか。」と僕たち家族全員に向かって大きな怒鳴り声を上げた。そして、おじいさんはすぐに電話をかけ直し、「先ほどは家のものが取りやめとお伝えいたしましたが、私はいたって元気であり、予定通り出演させてください。」と、時たま笑い声を交えながらお願いし、再度出演することになった。
当日、おじいさんは公民館に行く前にかかりつけの病院で無理を言って熱冷ましの注射を打ってもらった。公民館に着くとお母さんとお父さんは舞台裏でおじいさんの看病をしながら出演の準備を手伝った。僕は、おじいさんのことを気にかけながらも舞台裏の隅の方で黙って待っていた。
「康二。おじいさんの出番が近づいたら教えてくれよ。」
おじいさんは、にっこり微笑んで言った。
会場の役員の方が、
「そろそろですよ。」と合図をされたので、僕が、
「おじいちゃん、出番だよ。大丈夫？」と不安気に声をかけると、
「任せとけ！」と元気のよい返事が返ってきた。そして、立ち上がることがやっとのおじいさんは、お父さんとお母さんに支えられるようにして舞台に向かった。
ところが、ひとたび壇上に立つと、ピンと背筋を伸ばし、あいきょうたっぷりの笑顔とテンポのよい動きで、次々とマジックを披露していった。一つのマジックが終わる毎に、どっと驚きの声が会場に響きわたり、続いて拍手が巻きおこった。
いつもと何一つ変わりがないように見えたおじいさんだったが、舞台端からよく見ると、額から汗がだらだらとしたたり落ちていた。僕は、両手をギュッと握りしめると心の中で、
「早く時間が過ぎてしまえ！」と叫んでいた。
大盛況でマジックショーが終わった。
ほっとした表情でおじいさんは、

「今日は敬老の日。皆様おめでとうございます。私も来年から皆様の仲間になりますが、どうぞよろしくお願いいたします。私のつたない手品をご覧いただいたお礼と言っては何ですが、最後に遊び心ではじめたハーモニカではありますが、ご静聴下されば幸いと思います。いつまでもお元気で長生きしてください。」と言うと、ポケットから用意しておいたハーモニカを口にくわえた。そして、ゆっくりしたテンポで体をややゆらしながら目を閉じて『ふるさと』を吹いた。静まりかえった公民館の中には、おじいさんの奏でるハーモニカの音色が心地よく響いていた。また、会場のお年寄りの中には、ハンカチで目を覆っている人の姿が目についた。

拍手喝采の中、おじいさんは舞台裏までどうにか一人で歩いて帰ってきた。おじいさんは、僕を見つけるとハーモニカを手渡した。お母さんにビシャビシャになったシャツを脱がせてもらうと、体を冷やさないように着替えを済ませた。そして、お父さんはおじいさんを背負うと急いでお母さんと車で家に帰っていった。

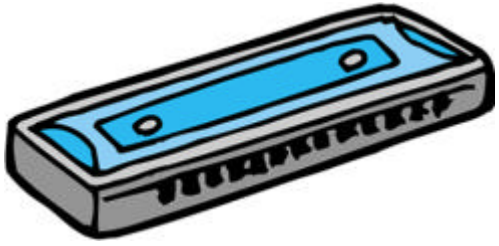
あまりの慌ただしさの中、当時の僕は何をしていいのかわからなく、ただただ大人の邪魔にならないように気をつけているのが精一杯だったような気がする。車に乗りそこねた僕は、しばらく公民館の外のベンチに腰掛けていた。

僕が人間として誇りをもって生きていくことの意味を意識したのはその時からだ。

物事を自分で考え、判断し、行動に移すとき、いつも心のどこかに、おじいさんの姿が浮かび上がって、僕の生きていく姿勢を規（ただ）している。周りの意見に流されたり、楽な方に気持ちがなびいたりして、「まあ、いいか。」と付和雷同的な生き方になりかけたときには、おじいさんの形見のハーモニカを手に取り、思わず背筋を伸ばすことがある。それは、僕の行動をじっと見つづけているおじいさんの目を意識すると、ぼやぼやしてはいられないと、緊張感が身にも心にもみなぎってくるからである。

考えてみると、僕はいつどこにいても全く一人ということはありえない。何らかの形で人につながり、人に支えられている。どこかで、常に私の生き様に注目している「一人の眼」こそ真実の眼であるのではないかと思う。

「一人の眼」というのは本当は自分の中にこそ持つべきものなのかもしれない。



活用に生かすための実践報告

◎「おじいさんのハーモニカ」

１　主題の設定

人間として誇りをもって生きていくためには，自ら考え，判断し，実行し，自己の行為の結果に責任をもつことが求められる。そのためには，自らの規範意識を高め，自らを律することができなければならない。さらに，他者との信頼関係を成立させるためには，常に自分に対しても他者に対しても誠実でなければならないことを考えさせるようにする。

資料は，自我に目覚め，自主的に正義感をもって行動することができるようになる第１，２学年を対象としている。周囲の思惑を気にして他人の言動に左右されやすい自分たちの姿を作者と重ね合わせ，おじいさんの生き方と対比させて扱えば効果的なものと思われる。

２　指導過程の工夫

単なる読みもの教材として扱うのではなく，導入場面での教師によるマジックの実演や終末時の道徳的価値の確認の場面での『ふるさと』試聴による音響効果など，関心を高め，感性に訴える授業をめざしたい。おじいさんが家族を一喝する場面では，作者も怒られた側にいるとの捉えでおじいさんの自分を律した生き方を考えさせた。

次に，おじいさんが，舞台に上がって見事に余興をやり終え，家に連れて帰ってもらう場面では，強い意志に支えられた責任ある行動のすばらしさや美しさを理解させたい。最後に作者が思いを語る場面では，人が成長していく過程には，他者に依存しながら自律していくスッテプがあり，最終的には，自分の内なる力によって自律することを考えさせたい。

３　発問の工夫

おじいさんの健康状態を気にして会への参加を気遣う家族の姿と強引にステージに立って責任を全うするおじいさんの姿とを対比し考えさせる発問をもとに，学習を深めた。さらには，マジックショーとハーモニカの演奏に思いを込めるおじいさんの生き方を通して，責任をもった行動というものは，自己に厳しい強い意志と自分や他者を思いやることが出来る誠実さを兼ね備えていなければならないことを訴えた。

４　生徒の反応（授業後の感想）

導入時の教師によるマジックは，学習への動機付けとして非常に有効であった。さらには，終末時のワークシート記入時の『ふるさと』のＣＤによる音響効果は抜群であり，感性に訴えることができた。最集場面の「一人の眼」なるものを自分の生活体験より想起することが難しいと訴える生徒がいた。

５　実践者からの一言

授業の効果を考えたとき，もしも，私が音楽に自信があれば，ハーモニカで『ふるさと』を熱演していたであろう。生徒の心に響かせる道徳の授業を考えるとき，教師は授業を一つの舞台に見立ててコーディネートする力量が必要であると感じた。同じ言葉でも伝え方によって受けとめや感じ方が違うように，教師は伝え方を指導技術として研鑽しなければならないと感じた。

（三原市立第一中学校　中尾和彦）